

現代中國語  
研究論集  
現代中國語研究会

ANDAI ZHONGGUOYU YANJIU LUNJI

中國書店

編集委員 (拼音順)

方 經民 (松山大学)

史 有為 (明海大学) 会長

王 占華 (北九州大学) 主編

張 黎 (大阪産業大学)

張 勤 (中京大学)

## 编辑缘起

现代中国语研究会从1996年7月成立至今已经整整三年。成立之初，我们就把务实、开放、平等、自由作为研究会活动的宗旨，同时也把自己与日本多个语言学社团的关系确定于“必要补充”这一位置上。三年来，依靠中日两国学人的支持与努力，研究会的活动由以关西地区为中心发展至关东，至今已在大阪、神户、东京三地共举行了二十次学术讨论会。通过这些活动，许多中日语言学同道坚持研究，相互切磋，积累了许多篇有价值的论文。为了进一步活跃日本的中国语学界，促进学术交流，并作为对已有刊物的必要补充，我们审定了包括中日两国学者在内的近三十篇论文，编成此书，以贡献于日本的同时也是世界的现代汉语学界。

本书秉持“论有所据，言之成理，尊重己见，文责自负”诸原则审查并选收各篇论文。

在本书整个策划、筹备、编审、出版的过程中，我们自始至终得到了日本中国书店与川端幸夫先生的大力支持，在此特表深深的谢意。

一九九九年九月

现代中国语研究会 谨识

## 目次

变调类型和上声变调 .....	石 锋·亓海峰	7
中古人声字在普通话里的语音分布 .....	丁 锋	21
现代语言学及其语法学的追求 .....	金立鑫	39
“做”和“作” .....	刘勋宁	57
日本的中文出版物中汉语夹用日语的情况调查 .....	胡士云	65
汉语复合词对同义语素的选择 .....	孟子敏	85
日中の敬語表現 .....	蘇德昌	95
空间指示的语用对比分析 ——以日汉现场指示对比分析为中心—— .....	余 维	111
試論中國僧人對訓詁學研究的貢獻 .....	梁曉虹	123
助动词“能”与“会”的句法语义分析 ——以表示能力与可能性为中心—— .....	渡边丽玲	147
关于程度副词“十分”和“非常” .....	原由起子	157
汉语连词产生和发展的历史回顾 .....	周 刚	171
中国語の「V着」について .....	王学群	207
外国学生学习动态助词“了 <sub>1</sub> ”的常见错误与分析 .....	冯富荣	227
汉语空间方位参照的认知特点和语义理解 .....	方经民	237
命令表現と丁寧さ——現代中国語の相手利益 命令表現を中心に—— .....	張勤·都築雅子·宮本節子	257
范畴语法的若干理论问题 .....	张 黎	275

工具宾语的受动化及其形成条件分析 .....	任 鹰	293
いわゆる「多主語構文」の日中語対照 .....	望月八十吉・望月圭子	317
“把个老汉感动得……” について .....	杉村博文	347
中国語に翻訳された文における受身文 .....	程遠巍	363
与方向动词研究相关的若干问题 .....	齐沪扬	373
对汉语宾语语义类别传统分类的再思考 .....	王占华	389
论“兼语式”及与其相关的句法结构系统 .....	张济卿	415
“在”格的“在”的隐现 .....	徐国玉	443
“的”字三辨 .....	史有为	453
与重音有关的句法现象 .....	史彤岚	481
重读《现代汉语法讲话》献疑 .....	宋玉柱	493
◎作者紹介 .....		507
◎英文目次 .....		508

# いわゆる「多主語構文」の日中語対照

望月八十吉・望月圭子

**提要** 本文通过汉语和日语的比较, 尝试从日语「多主语结构」的角度来对汉语的「主谓谓语句」进行分析。不同于汉语的缺乏任何形态标识, 日语里的名词词组均须附加表示主、宾格或主题等之助词。因此, 通过与日语的比较, 在对汉语的分析上往往可以得到意想不到的启示。

在第一节里我们首先提出在分析汉语「主谓谓语句」和日语「多主语结构」时所必需的理论背景。在此我们强调主题和主语乃不同的概念, 分属不同的分析层次, 前者是从语用的角度, 而后者是从句法关系的角度来对一个名词词组进行分析。之后, 我们遵循殷(1996)对汉语「主谓谓语句」的分类, 将之与日语的对应句作对照, 期盼从中得到一些新见解。

## 0. はじめに

本稿の目的は、中国語のいわゆる「主谓谓语句」(主述述語文)を日本語のいわゆる「多主語構文」と対照することによって、日本語からみた「主谓谓语句」の分析を提示することにある。日本語と対照することによる大きな利点は、日本語では、「は」「が」「を」「に」等の助詞が必ず名詞句につかなければならない点にある。中国語のいわゆる「主谓谓语句」における各名詞句には、何の標識もつかないのに対して、日本語の対応構文の名詞句には、必ず助詞がついており、特に「は」と「が」から、多くの示唆を得ることができる。

本稿の考察の手順として、まず、「主谓谓语句」や「多主語構文」の分析にあたり、前提となる理論的枠組みを提示する。即ち、名詞句の分析のレベルには、いくつかの自律的レベルがあり、主題という概念が、主語・目的語といった文法関係のレベルとは異なるレベルに属する、という前提を提示する。次に、殷（1996）が整理した「主谓谓语句」の各類のうち、典型度が高い三つの類について考察をすすめ、対応する日本語と対照させることによって新たに得られる知見を示したい。

## 1. 「主語＝主題」説への反論

中国語学における「主語＝主題」説の発端は、Chao（1968:69）に述べられている次の様な叙述にあるようである。

The grammatical meaning of subject and predicate in a Chinese sentence is topic and comment rather than actor and action.

また、朱（1982:17）は、次のように述べている。日本語訳は筆者による。

主語は陳述の対象、即ち話し手が言及しようとする話題である。述語は、主語に対する陳述、即ち主語がどうするか、どのようにであるか、或いは何であるかを説明しているのである。

さらに、中学・高校における学校文法体系の提要においても、文頭の名詞句を一律に主語とみなし、「主語＝主題」という立場をとっている。例えば、(1)のような主題文、所謂主谓谓语句の文頭の主題も、主語とみなしている。

(1) 这件事我没听说过。

この事は、私は聞いたことがない。

(1)において、文頭の名詞句「这件事」は、文法機能からいえば、「この事を聞く」という、「聞く」の目的語である。「这件事」は文頭に移動して談話機能上は主題として機能しているが、目的語という文法機能は不変である。しかし、学校文法においては、文頭の名詞句は一律に主語とみなすから、目的語が主題になっている場合の「这件事」も、主語ということになる。中国語において、「主語＝主題」という説明がなされてきた理由は、中国語には、「は」に相当する主題標識「至于/关于」や「が」に相当する動作主を示す標識「由」

が存在するものの、主題標識、主格・対格に相当する格標識が見つからない場合がほとんどで、主題及び主語には何の標識もつかないのが普通だからである。

しかし、このような中国語の孤立語性があるにせよ、「主語＝主題」説は正しくない。まず、現在の一般言語理論からみても、主題は談話機能上の概念であるのに対し、主語は述語に対してもつ文法機能上の概念として区別されている。例えば、表1に示すように、(1)文における名詞句を分析する場合、さまざまなレベルが想定される。

(表1)

レベル	分析手段	这件事 我 没听说过
統語論	文法機能	目的語 主語 <述語>
意味論	意味役割	対象 経験者 <述語>
談話文法	談話機能	主題 <評言>
	情報構造	旧情報 <新情報>

表1のような枠組みでは、主語と主題は、それぞれ統語論と談話文法といった互いに自律的なレベルの概念であり、(1)文においては、主語と主題は異なる名詞句が担うことになる。

さらに、中国語では、主語と主題が、異なった振る舞いをみせる言語現象がある。以下、その例を二つあげる。

まず第一に、中国語の再帰名詞「自己」は、日本語の「自分」と同様、主語を先行詞にとる。次の例をみよう。

(2) 张三，我曾在自己的房间里看护过。

張三は、私はかつて自分(=私)の部屋で看病したことがある。

(2)では、再帰名詞「自己」の先行詞は、文頭の名詞句、主題「張三」ではなく、動詞「看病する」の主語である「私」である。「自分」が主語を先行詞にとるという言語現象は、何が主語かを決定する判断基準となるが、中国語においても同様に、主語の判断基準となる。この現象は、中国語においても主語と主題を区別すべき根拠のひとつとなる。

第二に、「名詞化(nominalization)」における主語と主題の振る舞いの相違をみよう。日本語には、「が/の」交替という現象があるが、中国語でも、「主



語/主語+属格」の交替という同様の現象がある。例を挙げよう。

(3) a. 张三不愿意去日本。

张三は、日本へ行きたくない。

b. [张三不愿意去日本] 是有道理的。

[张三が日本に行きたくない] のには、理由があるのだ。

c. X[[张三的 [不愿意去日本]] 是有道理的。

[张三の [日本に行きたくない]] のには、理由があるのだ。

(3a) の単文が主語節となって名詞化されると、(3b) の主語節のようになるが、主語節の主語は、(3c) のように、日中両語とも属格を伴って「张三の日本に行きたくないのには」のような「主語+属格+述語」構造に変換可能である。しかし、主題は、(4) に示すように、こうした変換が不可能である。

(4) a. 日本，张三不愿意去。

日本へは、张三は行きたくない。

b. \*日本，[张三不愿意去] 是有道理的。

\*日本へは、[张三が行きたくない] のには、理由があるのだ。

c. \*[[日本的 [张三不愿意去]] 是有道理的。

\*[[日本の [张三が行きたくない]] のには、理由があるのだ。

「主語=主題」説によれば、(3a) の文頭の名詞句「张三」も、(4a) の文頭の名詞句「日本」もどちらも主語となるわけであるが、「张三」の場合は属格を伴ってc文のような転換が可能であるのに対し、「日本」の場合は同様の転換が不可能である現象の説明がうまくつかない。日本語においても、中国語においても、主語という文法機能のみが、属格との交替を許すのである。このような現象も、中国語において、主語と主題を区別する根拠となる。

以上みてきたことを要約すると、次のようになる。文法機能を表す主語と、談話機能を表す主題とは、普遍的に別の概念である。この普遍的原則は、中国語においても、再帰名詞の先行詞決定と名詞化における属格との交替において、主語と主題が異なった振る舞いをする現象に反映されている。

## 2. 「主谓谓语句」と日本語の対応表現

殷(1996)は、中国語の主谓谓语句について、過去の先行研究を整理し、以下のような分類を行っている。

A類：典型的な主述述語文。文頭の名詞は、動詞と格関係をもたず、後続する主述述語と陳述関係をもつ。大主語と小主語の間には、従属関係がある。先行研究の全てがこの文型を主谓谓语句と呼んでいる。

他身体健康。 彼は体が健康である。

他性格坚强。 彼は性格が強い。

B類：文頭の名詞句が、時間詞か場所詞である場合。先行研究では、これを主谓谓语句と呼ぶか否かについては、議論の分かれるところであり、時間詞・場所詞を副詞とみなし、主谓谓语句とはみなさない考えもある。

今儿王先生来。 今日は王さんが {来る/来た}。

山上山下，土壤气候等等都不一样。 山の上と下では、土壤気候などが全然違う。

C類：大主語又は小主語が、動詞の「受事」である場合。50年代の主語賓語論争で議論の的となった文型である。大主語又は小主語を「賓語提前」されたものとみなすならば、主谓谓语句ではないが、前に移動した目的語が主語の地位をもつとみなすならば、主谓谓语句とみなされる。

这个人我认识。 この人は、私は知っている。

他一句话也不说。 彼は一言も話さない。

D類：文頭の名詞句が動詞と文法関係をもたず、「至于/关于」といった前置詞を文頭の名詞句につけることができる文型。

这件事，我有不同看法。この事には、私は違った考えを持っている。

田间管理，他的经验很丰富。 耕地管理は、彼が経験が豊富だ。

E類：文頭の名詞句が文中の代名詞と同一指示関係をもつ場合。これを主谓谓语句とみなさない考えも多い。

这样的好同志，我们喜欢他。 こんなに素晴らしい同志、私達は彼が好きです。

这群燕子，它们都知道春夏秋冬。 このツバメたち、彼らは皆春夏

秋冬を知っている。

F類：文頭の名詞句が全体、後続の名詞句がその部分という関係にある場合。

她写的字，有的大，有的小。 彼女の書いた字は、あるものは大きく、あるものは小さい。

姚志兰和吴天宝，一个是电话员，一个大车司机。 姚志兰と吴天宝は、一人 {は/が} オペレーターで、一人 {は/が} 汽車の機関士だ。

G類：主語の後に二つの動詞（形容詞を含む）又は動詞句が続く文型。

你说话太快。 君は話すのが速すぎる。

老一辈写字用毛笔。 年配の人は、字を書くのに毛筆を使う。

本稿では、紙幅の関係上、以上の7分類の各主謂謂語句のうち、A、B及びC類という、典型度が高い三類について、日本語の対応表現と対照させながら、考察をすすめたい。

## 2.1 A類：「象は鼻が長い」型

A類は、「他身体健康」「他性格坚强」といった、典型的主謂謂語句である。日本語では、「象は鼻が長い」に代表されるような二重主語構文がこのタイプに対応する。文頭の名詞句と後続する名詞句の間は、「分離不可能所有」(inalienable possession) 関係にある。即ち、第二の名詞句が第一の名詞句の身体部分や属性であり、所有者から切り離すことができないような所有関係である。こうした文型において、文頭の名詞句は、評言中の述語と文法機能関係をもたない。生成文法の枠組みでいえば、深層構造においてすでに文頭の位置を占めているタイプの名詞句である。こうした構造は、主語と述語に形態的「一致」(agreement) が存在する印欧語では許されない。一方、日本語も中国語も、主語 - 述語間の一致が存在しないので、両言語ともに、「象は鼻が長い」型文型が可能である。例をみよう。

(5) 大象鼻子长。

象は鼻が長い。

(6) 我肚子饿了。

私はお腹がへった。

こうした文型の文頭の名詞句は、中国語学界では、「二重主語 (double nominative) 文」の「大主語」又は「関係語」(王 1956) などと呼ばれ、統語的分析の枠からはみ出た、特殊な成分とみなされてきた。Li and Thompson (1976) が、中国語を「主題卓越言語」(topic-prominent language) と分類したのも、彼らがこの文型の文頭の名詞句を主題として注目し、「中国語では、主題-評言構造がより基本的な文法構造である」と判断した結果である。また、Chafe (1976:50) は、この型の主題を「中国語型主題」と呼び、英語には、このような主題を成立可能にするための文法手段が存在しないと述べている。また、彼は、この型の主題は、英語における所謂主題と呼ばれるもの(移動によって生じる主題、例えば、This book I already read. の文頭に移動した目的語を担う主題 this book のようなものを指す)とは異なり、対比の意味を全く含まず、評言の叙述内容の枠組みを決定する機能を持っていると述べている。さて、「象は鼻が長い」を、表1で示したようなレベル別に分析すると、(7) のようになる。

(7)

	象は	鼻が 長い
文法関係		<主語> <述語>
情報構造	<旧情報>	<新情報>
談話構造	<主 題>	<評 言>

ここで問題となるのは、「大象鼻子长」が必ずしも「象は鼻が長い」という日本語に対応しないことである。コンテキストによって、例えば、「象が鼻が長い」という日本語にも対応しうるのである。例をみよう。以下、例文中の下線部は、新情報を表す部分である。

(8) A: 什么动物鼻子长?    どんな動物が鼻が長いのですか。

B: 大象鼻子长            象が鼻が長いのです。

(8B) では、「ある動物は鼻が長い」という前提のうえにたった疑問に対して、「大象」が焦点となっている。この場合、対応する日本語は、「象が鼻が長い」となり、「象」には、久野(1973)の術語を借りれば「総記」の「が」がつく。

(8B) は、(7) とは異なり、主題構造ではない主述述語文である。

ここで、「大象鼻子长」が、コンテキストによって、どのような「は」と「が」の組み合わせの日本語文に対応するかを整理しよう。久野(1973)によれば、「は」の用法には、「主題」と「対比」、「が」の用法には、「中立叙述」と「総記」があるとされているが、以下、久野の術語に従って「は」と「が」の用法を示す。下線部は、新情報を担う部分である。

(9) A: 大象有什么特点? 象はどんな特質があるの。

B: 大象鼻子长。 象は 鼻が 長い。

主題 中立叙述

(10) (= (8))

A: 什么动物鼻子长? どんな動物が鼻が長い。

B: 大象鼻子长。 象が 鼻が 長い。

総記

(11) A: 大象身上什么长? 象は体のどこが長い。

B: 大象鼻子长。 象は 鼻が 長い。

主題 総記

(12) A: 什么动物鼻子长, 但尾巴短? どんな動物が鼻は長いが、尻尾は短い。

B: 大象鼻子长, 但尾巴短。 象が、鼻は長いが、尻尾は短い。

総記 対比

(13) A: 大象有什么特点? 象は、どんな特質があるの。

B: 大象鼻子长, 但尾巴短。 象は、鼻は長いが、尻尾は短い。

主題 対比

この他にも、理論的には、「対比の‘は’」+「対比の‘は’」、「総記の‘が’」+「総記の‘が’」及び「対比の‘は’」+「主題の‘は’」の組み合わせもありうるが、実際の談話原則からすると不自然であるので、考慮の対象からはずすことにする。

さて、日本語の対応表現から「大象鼻子长」という主述述語文をみると、まず、文頭の名詞句「大象」は、それが担う情報が旧情報か新情報かによって、主題でもありうるし、焦点でもありうる。また、二番目の名詞句「鼻子」は、中立叙述にも対応すれば、焦点、対比でもありうる。以上の考察をまとめる

と、A型主述述語文の文頭の名詞句は、主題又は焦点であり、それを決定するのは、文脈からきまる情報構造である。文頭の名詞句は、文法機能レベルでは、主語とはみなされず、第二の名詞句が述語の外項 (external argument)、即ち主語である。

## 2.2 B類：場面設定語型

文頭の名詞句が、時間詞又は場所詞であるような主述述語文がこの型である。文頭の時間詞及び場所詞は、一般に、後続する陳述の場面設定の役割をもつ。こうした機能から、これを「場面設定語」(scene setter) と呼ぶことにしたい。まず、例をみよう。

(14) 今儿天气很好。今日<sup>は</sup>天气<sup>が</sup>良い。

(15) 这个农场在十年内乱中，土地荒芜，杂草丛生。この農場<sup>は</sup>、十年の内乱中<sup>は</sup>、土地<sup>が</sup>荒れ果て、雑草<sup>が</sup>ぼうぼうだった。

日本語においては、場面設定語には、一般に「は」がつく。(14) (15)において、「今日」「この農場」「十年の内乱中」といった場面設定語に「が」をつけると、非常に不自然である。しかし、場面設定語は、以下の例文(17)及び(19)が示すように、コンテキストによって、焦点にもなりうる。下線を引いた部分が、焦点を担う名詞句である。

(16) a. A: 夏はどんな飲み物がおいしいかな。

B: 夏<sup>は</sup>、ビール<sup>が</sup>おいしい。

b. A: 夏天什么饮料最好喝?

B: 夏天啤酒最好喝。

(17) a. A: いつ、ビールがおいしいかな。

B: 夏<sup>が</sup>、ビール<sup>が</sup>おいしい。

b. A: (是) 什么季节啤酒最好喝?

B: (是) 夏天啤酒最好喝。

(18) a. A: 文明国は、男女のどちらが、平均寿命が短いのですか。

B: 文明国<sup>は</sup>、男性<sup>が</sup>、平均寿命<sup>が</sup>短いです。

b. A: 文明国家，(是) 男性还是女性平均寿命短?

B: 文明国家，(是) 男性平均寿命短。

(19) a. A : どのような国が、男性が、平均寿命が短いのですか。

B : 文明国が、男性が、平均寿命が短いのです。

b. A : (是) 什么样的国家, 男性平均寿命短?

B : (是) 文明国家, 男性平均寿命短。

(16) から (19) までの各文では、「夏」「夏天」「文明国」「文明国家」といった場面設定語が文頭に位置している。場面設定語が文頭にある場合は、「～は」「～が」名詞句の重出を招くことが多い。ここで、特に問題になるのが、「が」の重出である。「が」は、形態格のレベルでは主格であるが、では、「が」名詞句が三つ出てくるような (19a.B) では、三つの「が」名詞句全てが、主語とみなされるべきなのだろうか? こうした文型が、所謂「多主語文」であるが、これら全てを主語とみなすべきかどうかについては、さまざまな議論がある。中国語においても、場面設定語を文副詞 (状語) とみなすか、主語とみなすかで議論がある。文副詞とみなすなら、(16) ~ (19) の各 b 文は、主述述語文ではないが、主語とみなすなら、主述述語文となる。日本語における、「は」や「が」の重出文においても、同様の議論がある。

しかし、表 1 で示したように、主語を、述語との文法関係というレベルで規定するならば、「おいしい」という述語が外項としてとる「ビール」だけが主語であり、「短い」という述語が外項としてとる「平均寿命」だけが主語である。では、なぜ日本語の場合、主格が三つ連なって出てくる文が許されるのだろうか。これは、ひとつには、日本語において、形態格のレベルと文法関係のレベルが、互いに自律的レベルであることがあげられる。次の例が示すように、主格が必ずしも主語を表さない場合が日本語には多々あるのである。他動性の低い状態述語 (願望、心理状態、可能、必要など) の目的語が、主格をとるのがその代表例である。例をあげよう。次の日本語の例文で、「こと」従属節を用いているのは、「は」がつく可能性を排除し、元来の格を表示するためである。下線部は、目的語を示す。

(20) a. 私が コーヒーが 飲みたいこと (に彼は気づかない)。

文法関係	主語	目的語
格	主格	主格

b. (他没发觉) 我想喝咖啡。